

# 教職課程

## 自己点検・評価報告書

新潟薬科大学 応用生命科学部

2023年3月

# 新潟薬科大学 教職課程認定学部・学科一覧

## 応用生命科学部（応用生命科学科）

### 全体評価

新潟薬科大学応用生命科学部の教職課程は、2012年4月に応用生命科学部応用生命科学科にコース制（食品科学コース、バイオ工学コース、環境科学コース、理科教職コース）が設置されたことに始まる。その後、2018年には大学院応用生命科学研究科博士前期課程に理科教職専修コースが設置され、発展してきた。2021年度までの免許状取得件者は127人であり、そのうち43人が教員として正規採用され、新潟県に留まらず全国の自治体で教壇に立ち活躍している。

教職課程設置から10年という節目にあたる今回の自己点検・評価は、本学教職課程運営委員会が中心となり、3つの「基準領域」で定められた各項目について実施した。この度の自己点検・評価により、本学教職課程での個々の学習状況に応じた丁寧な指導、地域連携活動を介した実践的指導力養成などの高く評価ができる内容が明らかになったが、その一方で理科教職コースと理科教職外コースの学生で、それぞれ異なる様々な課題があることも明らかとなった。

新型コロナウイルスの影響、教師に対するイメージの悪化などのマイナス要因が見受けられる中で、本学における教職課程は、学生のキャリア選択の1つとしての位置づけであるだけでなく、学生を「理科(サイエンス)の楽しさを伝えることができる」教員として育成し、社会に送り出して貢献できていると自己評価している。今後も本学教職課程の長所を伸ばし、課題を解決して、その質の向上に前向きに取り組んでいきたいと考えている。

新潟薬科大学応用生命科学部

学部長 高久洋暁

## 目次

I	教職課程の現況及び特色	1
II	基準領域ごとの教職課程自己点検評価	3
	基準領域1	3
	基準領域2	6
	基準領域3	9
III	総合評価	12
IV	「教職課程自己点検・評価報告書」作成のプロセス	13
	現況基礎データ票	14

【 凡例 】

本報告書は、文部科学省「教職課程の自己点検・評価及び全学的に実施する組織に関するガイドライン」（2021年5月）を指針とし、全国私立大学教職課程協会教職課程質保証評価に関する特別委員会編『「教職課程自己点検評価報告書」作成の手引 改訂版』（2022年2月）に示された形式と基準項目等に準拠して作成された。

尚 [ 根拠となる資料・データ等 ] 内の一部の文書に付された※は、学内のサーバーに所収されていることを表し、個人情報保護のため、学内関係者のみがアクセス可能であることを示している。

## I 教職課程の現況及び特色

### 1 現況

(1) 大学名：新潟薬科大学応用生命科学部

(2) 所在地：新潟県新潟市秋葉区東島 265 番地 1

(3) 学生数及び教員数

学生数：69 人（教職課程を履修する学生数） 512 人（全学生数）

教員数：5 人（教職課程専任教員数） 30 人（全教員数）

### 2 特色

新潟薬科大学は、1977 年に新潟県内初の私立大学として創立された。当初は薬学部  
のみの単科大学であったが、2002 年に応用生命科学部が設置され、生命科学系の総合  
大学となった。

応用生命科学部は、『実学一体』の精神のもと、生命科学を応用して社会の課題解決  
に貢献する人材を育成すること」を掲げ、具体的には「食品、農業、環境及び健康等の  
生命に関わる産業において、科学及び技術を中心とした専門知識を理解し応用できる能  
力を備えた人材、並びに中等教育において理科教育に造詣が深い教員を育成する」こと  
を教育研究上の目的としている。〈資料 1〉

上記の理念及び目的に基づき、2012 年に応用生命科学部応用生命科学科に教職課程が  
設置された。また 2018 年には大学院応用生命科学研究科博士前期課程に理科教職専修  
コースが設置された。〈資料 2〉

本学で取得できる教員免許状は中学校教諭一種免許状（理科）、高等学校教諭一種免  
許状（理科）、中学校教諭専修免許状（理科）、高等学校教諭専修免許状（理科）の 4  
種類で、明星大学との教育業務提携により科目等履修生として小学校教諭二種免許状  
の取得も可能である。2021 年度までの免許状取得件者はそれぞれ 2 人（中学・高校専  
修）、122 人（中学・高校一種）、3 人（小学校二種）であり、そのうち 43 人が教員と  
して正規採用され、新潟県や近隣県だけでなく全国の自治体で教壇に立ち活躍してい  
る。〈資料 3〉

本学部教職課程が育成を目指すのは「理科（サイエンス）の楽しさを伝えることがで  
きる」教員である。そのために第 1 の特色として、本学部の中心領域である化学、生物  
学の両分野にまたがる生命科学の最先端の理論を学び、豊富な実験や演習を履修するこ  
とを通して、教職を目指す学生自身がまず“サイエンスが好きで、サイエンスを深く理解  
している”ことを重視している。

第2の特色としては、実践的な指導力の育成に努めていることが挙げられる。今日の教育現場では子どもたちとそれを取り巻く社会の急激な変化により、教育課題が多様化・複雑化する傾向にあり、教壇に立ったその日から、臨機応変にそれらの課題に対応する力が求められている。そのため初年次から近隣の自治体や学校と協力して、科学実験の補助、学習支援ボランティア、理科支援員などに取り組む「学習支援実地演習Ⅰ～Ⅲ」などを通して、学校現場と大学における講義等を往還しながら、教職の学びを深化させる体制を構築している。

[ 根拠となる資料・データ等 ]

〈資料1〉 応用生命科学部 教育研究上の目的と3つのポリシー

<https://www.nupals.ac.jp/applied/policy/>

〈資料2〉 大学概要／沿革

<https://www.nupals.ac.jp/about/feature/>

〈資料3〉 教職課程に関する情報

<https://www.nupals.ac.jp/about/info-teachertraining/>

## II 基準領域ごとの教職課程自己点検評価

### 基準領域 1 教職課程に関わる教職員の共通理解に基づく協働的な取り組み

#### 基準項目 1-1 教職課程教育に対する目的・目標の共有

##### [ 現状説明 ]

教職課程を設置している応用生命科学部応用生命科学科は、Iで述べた教育研究上の目的を達成するために、「学位授与の方針（以下ディプロマ・ポリシー）」を定めている。本学部教職課程で育成を目指す教師像は、ディプロマ・ポリシー中に理科教職コースの項で示されている。そこでは教職課程を履修した学生に育成すべき資質・能力として、「プロフェッショナルリズム」、「コミュニケーション力」、「生命科学を中心とした理科の中等教育に関する知識・技能」、「問題発見・解決力」、「地域貢献力」の5つの柱を立て、その具体的内容が明示されている。〈資料1〉

この資質・能力は2020年度に、教職課程運営委員会、教務委員会、教授会での論議を経て、教育研究評議会で決定されており、全ての関係教職員によって共有されている。

学生に対しては、1学年入学時の「教職課程ガイダンス」をはじめ、各学年の履修開始時にそれぞれ「教職課程ガイダンス」を実施し、教職課程の目的・目標と目指す教師像を説明して、共通理解を図っている〈資料2〉

また学生に定期的な更新を求めている教職履修カルテには、更に具体化された学年ごとに身につけるべき「必要な資質・能力」が示されており、育成すべき教師像に向けて、学生がどのような目標を立て、どのように取り組むべきかという方向性を示すものとなっている。〈資料3〉

##### [ 長所・特色 ]

本学部教職課程の育成すべき資質・能力／目指す教師像は、学部全体のポリシーの見直しと統一性を持って論議され決定されており、関係教職員による教職課程の目的・目標についての十分な理解の上で、学生に対する教育・指導が進められている。

また教職履修カルテ上の「必要な資質・能力」の項目には、上記のディプロマ・ポリシーで示された資質・能力が、学年ごとの講義や演習とリンクさせながら、更に具体化して示されており、学生は記入に際して「自己評価の基準となる指標」に基づき、目標に対する自己の達成度を数値化した上で、総合的に省察できるようになっている。

##### [ 取り組み上の課題 ]

ディプロマ・ポリシーの資質・能力を、その時々の教育課題や本学学生の現状に応じて具現化・精緻化するという観点から、教職課程運営委員会の年間目標等の下位目標にも落とし込み、教職員の共通理解と協働的な取り組みを一層進める必要がある。

また目指す教員像を学生が直接意識する機会となる教職カルテについては、自己評価の項目と指標を適宜見直していくことが求められる。更に教員からのコメント期間を明確にするなどフィードバック体制をより確実なものにすることが課題である。

#### [ 根拠となる資料・データ等 ]

〈資料 1-1-1〉新潟薬科大学の理念及び目的 <https://www.nupals.ac.jp/about/idea/>

〈資料 1-1-2〉※応用生命科学部委員会>教職課程運営委員会>教職課程オリエンテーション資料（各学年）

〈資料 1-1-3〉※応用生命科学部委員会>教職課程運営委員会>教職履修カルテ

### 基準項目 1－2 教職課程に関する組織的工夫

#### [ 現状説明 ]

本学部では教職課程全般を運営する組織として、教職課程運営委員会を設置している。同委員会は理科教職コース教員 5 名、理科教職コース外の教員 1 名の合計 6 名と事務部教務課長、教職担当から構成されており、教職課程の適正な履修に関する事項、授業運営、教育実習、介護等体験、教員採用選考試験対策、学修相談等、カリキュラムマネジメント全般を担っている。理科教職コース教員 5 名のうち、2 名は中学校教員として 25 年以上の経験を持つ実務家教員であり、他の 1 名は高等学校非常勤講師 3 年以上の経験を持っている。〈資料 1〉

教職課程に関する重要事項については、学部教授会、更には全学教育研究評議会の決定を仰ぐことになるが、それ以外にも、教職課程運営委員長が部局の質保証推進委員会に所属し、教職課程に関する諸事項や課題を報告し、学部執行部や他の教職員と日常的に意見交換を行っている。〈資料 2〉

教職課程教育の施設として、教職を履修する学生専用の演習室 2 室が確保されている。一室は模擬授業用に、中学・高校の教室サイズの黒板、教卓、机・椅子に加えて、電子黒板、ビデオ／書画カメラを配置している。もう一室には、教職演習の各種データ、教職関連の書籍・雑誌、参考書、過去の教育実習や採用試験に関する文書、体験記等が保管されている。〈資料 3〉

また、教職課程の質的向上のために、学期ごとに実施される学部全体の授業評価アンケートを活用し、授業改善のサイクルを機能させている。更に卒業時には教職課程の独



自アンケートを実施し、授業内容、カリキュラム、サポート体制、施設面等についても学生の率直な意見を集め、課題を析出し、改善につなげている。〈資料4、5〉

教育職員免許法施行規則に定められた教員養成に関する情報は、本学ホームページにおいて公開し、年度ごとに更新を行っている。〈資料6〉

### [ 長所・特色 ]

教職課程の運営を個々の担当教員任せにすることなく、教職課程運営委員会をベースに、部局の質保証推進委員会のサポートやチェックを受けながら組織的に進めている。一方で関係教職員の数が少ない点を生かして、短時間の打ち合わせを日常的に実施し、学生の情報交換や指導方針・内容の摺り合わせを行っている。

教職課程専用の演習室は、3年生以上の理科教職コースの学生が自由に使用することができ、演習の準備や教員採用選考試験対策の自主学修を進める際に、ハード、ソフトの両面で良好な環境を提供している。

### [ 取り組み上の課題 ]

「教科及び教科の指導法に関する科目」「教育の基礎的理解に関する科目」他を担当する学外非常勤講師とも、本学部教職課程で育成したい教師像や資質・能力について、共通理解を図る場を持つ必要がある。

また前述の教職演習室が学内事情により、2022年度内に移動することが決定されている。移動後においても、良好な環境となるような施設・整備の維持管理が課題である。

### [ 根拠となる資料・データ等 ]

〈資料1-2-1〉 ※新潟薬科大学応用生命科学部各種委員会等設置に関する規程

〈資料1-2-2〉 ※応用生命科学部委員会>質保証推進委員会

〈資料1-2-3〉 ※応用生命科学部委員会>履修ガイド・学生便覧

〈資料1-2-4〉 ※応用生命科学部委員会>授業評価アンケート

〈資料1-2-5〉 ※応用生命科学部委員会>教職課程運営委員会>終了時アンケート

〈資料1-2-6〉 教職課程に関する情報

<https://www.nupals.ac.jp/about/info-teachertraining/>

## 基準領域2 学生の確保・指導・キャリア支援

### 基準項目2-1 教職を担うべき適切な人材（学生）の確保

#### [ 現状説明 ]

学生を受け入れるにあたっては「入学者受け入れの方針（アドミッション・ポリシー）」を踏まえた選考を行っている。入学後、学生は「教職課程ガイダンス」において教職課程の目的／目指す教員像に加えて、取得すべき科目、単位数、演習・実習の内容など予想される負担についても情報を得、更にアドバイザー教員からの意思確認を経た上で、「教職履修届」を提出して履修を開始することとしている。〈資料1〉

本学部では、学生は2学年後期から4つのコース（食品科学・バイオテクノロジー・生命環境化学・理科教職）を選択しコース別のカリキュラムを履修することになっており、理科教職コースは、教職への入職をメインターゲットとしている。同コースに関心を持つ学生に対しては、2年生前期に教職履修カルテ等に基づいた履修指導やカウンセリングの機会を設けている。またコースに進んだ後は、教職演習Ⅰ、Ⅱをはじめ、教職に特化した学修の機会が数多く設定され、教職に関心を持った学生が、更に意欲を高め、最後まで教職を目指すことをサポートする体制をつくっている。〈資料2〉

また2016年より、明星大学との教育業務提携によって科目等履修生として小学校教諭二種免許状の取得も可能となっているが、出願に際しては面接を実施し、理科教職コースを選択予定で、通信教育と本学のカリキュラムとを並行して学ぶ意欲と適正があると判断した学生のみに出願を認めている。〈資料3〉

#### [ 長所・特色 ]

コースの専任教員が5人であるのに対して、教職課程履修者は2021年度までの年度平均で17.4人（10～23人）、そのうち理科教職コース選択者は同11.4人（5～16人）である。この人数は学内外の活動や演習に集団として協働で取り組みつつ、個々の学習状況に応じた丁寧な指導を受けることを可能にする適切な人数であり、教員と学生の間「顔が見える」サポートの関係が成立していると言える。この「少人数の良さ」を評価する声は教職課程終了時アンケートにおける自由記述に多く記述されている。〈資料4〉

#### [ 取り組み上の課題 ]

ここ数年、2学年後期に理科教職コースを選択した後、早々に教職から一般企業等へと進路変更する学生が出ている。コース選択にあたっての十分は情報提供とカウンセリングにより、コース選択と進路希望のミスマッチを減少させることが求められる。

#### [ 根拠となる資料・データ等 ]

- 〈資料 2-1-1〉 ※応用生命科学部委員会>教職課程運営委員会>教職課程オリエンテーション資料（各学年）
- 〈資料 2-1-2〉 シラバス・時間割（応用生命科学部 第2学年科目 第3学年科目）  
<https://www.nupals.ac.jp/about/syllabus/>
- 〈資料 2-1-3〉 ※応用生命科学部委員会>教職課程運営委員会>明星大通信教育
- 〈資料 2-1-4〉 ※応用生命科学部委員会>教職課程運営委員会>終了時アンケート

## 基準項目 2-2 教職へのキャリア支援

### [ 現状説明 ]

年度当初、各学年で実施される「教職課程ガイダンス」において、卒業生の進路状況や自治体の採用状況など、学生がキャリアプランを立てるための最新の情報を提供している。また教採受験をはじめ、キャリアに関する疑問や悩みについては、キャリア支援室と連携しながら、適宜カウンセリングを実施する体制をとっている。〈資料1〉

理科教職コースに進んだ学生には、教員採用に向けた直接的なキャリア支援として、3学年後期から4学年前期まで、正課外で「対策演習」を延べ142コマ（2021.9～2022.5）実施しており、ほとんどの学生が参加している。内容としては理科の各分野、教職教養、一般教養についての講義／演習に加えて、キャリア支援室の協力による人物試験の指導を含んでいる。〈資料2〉

また、4学年春には新潟県教育庁義務教育課、新潟市教育委員会教職員課による公立学校教員採用選考試験に関する説明会を実施している。〈資料3〉

教職に就いている卒業生との連携については、最初の卒業生が出た2016年より、毎年夏に教職課程履修中の在学生、卒業生、県内の中学・高等学校教員を対象に「理科教職フォーラム」を開催している。このフォーラムでは基調講演の他に、卒業生による教科指導、生徒指導、学級経営等の実践発表を行っている。また在学生からの疑問に、卒業生が自身の体験等を語る場も設定されていて、今日の学校現場のリアルな状況や若手教員の役割を知る機会となっている。〈資料4〉

### [ 長所・特色 ]

I-2の特色でも述べたように2021年度までの免許状取得件者122人のうち76人が教員採用選考試験を受験し、過年度卒も含めて43人が正規採用されている。〈資料5〉これは1学年次から教職への入職を意識した情報に頻繁に接するようにしていることと、採用試験を見据えたボリュームのある「対策演習」が効果を上げていると考えられる。また受験者のほとんどが所属する理科教職コースが、同じ目標を共有する仲間として協働や学び

合いの単位となっていることも挙げられる。更に先に述べた「理科教職フォーラム」では、困難の多い学校現場で、若手教員（卒業生）がどのようにやりがいを見出しているかを学ぶ場ともなっており、採用試験に向けた準備のモチベーションを上げることに貢献している。

#### [ 取り組み上の課題 ]

「対策演習」は長期休業中と講義の空きコマを使って行われるが、教員・学生の双方の日程を調整することが年々難しくなっている。また学部全体の教員数が減少している中で、「対策演習」の実施が担当教員に負担となっている側面があり、負荷を減らしながら効果の高い「対策演習」のあり方を検討することが求められている。

#### [ 根拠となる資料・データ等 ]

〈資料 2-2-1〉 ※応用生命科学部委員会>教職課程運営委員会>教職課程オリエンテーション資料（各学年）

〈資料 2-2-2〉 ※応用生命科学部委員会>教職課程運営委員会>教採対策

〈資料 2-2-3〉 ※応用生命科学部委員会>教職課程運営委員会>教採対策

〈資料 2-2-4〉 ※応用生命科学部委員会>教職課程運営委員会>理科教職フォーラム

〈資料 2-2-5〉 教職課程に関する情報

<https://www.nupals.ac.jp/about/info-teachertraining/>

## 基準領域3 適切な教職課程カリキュラム

### 基準項目3-1 教職課程カリキュラムの編成・実施

#### [ 現状説明 ]

教職課程を有する応用生命科学科では、全体として1学年から2学年前期までは、生物学系、化学系、境界領域の共通必修科目を履修し、2学年後期からは4つのコース（食品科学・バイオテクノロジー・生命環境化学・理科教職）に分かれてそれぞれのコース専門必修・選択科目を履修するカリキュラムとなっている。教職課程は1学年前期から「教育の基礎的理解に関する科目」他を系統的に履修すると共に、学科の必修科目との関連を図りながら「教科の指導法」についての履修を重ね、4学年進級時に教職課程運営委員会で履修要件を満たしていると判定された学生が教育実習を行うカリキュラムとなっている。

#### 〈資料1〉

それぞれの講義・演習の学習内容と評価方法はシラバスに明示されており〈資料2〉、科目配列の系統性と相互の連関については理科教職コースのカリキュラムツリーに整理されている。〈資料3〉

学生は自らの取得単位等の情報を教職履修カルテに記入し、担当教員はそれを確認の上で、資質・能力の育成状況と併せて、全体指導や個別のカウンセリングに繋げている。また4学年時の教職実践演習ではその記入内容を活用している。〈資料4〉

情報活用能力を育てる教育への対応としては、小中学校で使用されている思考支援ソフトをセットアップしたICT端末10台以上を導入し、2022年度から教育方法論や理科教育法をはじめとして、講義・演習での活用を開始している。〈資料5〉

尚、理科教職コースに所属する学生については、教職課程認定科目以外に「教職演習Ⅰ」、「教職演習Ⅱ」をコース専門必修科目として課しており、今日の教育課題に対応したより実践的な資質・能力の育成をねらっている。〈資料6〉

#### [ 長所・特色 ]

上で述べた「教職演習Ⅰ」「教職演習Ⅱ」では、「教育の基礎的理解に関する科目」「各教科の指導法」等ではカバーされない知識・技能を学ぶ時間として、学生による模擬授業、理科教職実験、現役の中学・高校教員による講義、教育時事問題に関するディスカッションなどを行い、資質・能力の向上に成果を上げている。特に模擬授業では学校の教室を模した教職実践演習室を使用し、現場の教室に立った際の臨場感の中で、説明、発問、板書等の基本的な技能に加えて、「主体的・対話的で深い学び」を目指した協働学習の工夫等に取り組んで実践力を醸成している。

### 〔 取り組み上の課題 〕

応用生命科学科では、共通必修科目に多くの実験が組まれていることもあり、もともと学生にとっては時間的にタイトなカリキュラムとなっている。特に理科教職コース以外のコースに進んだ学生にとっては、その負担感から免許取得を断念してしまうケースも見られるため、個別の学修状況に合わせた履修指導が求められる。

また生物学、化学分野に比して、物理学、地学分野の講義が少なく、正課外の「対策演習」で補充的な学修を課している。

### 〔 根拠となる資料・データ等 〕

〈資料 3-1-1〉 シラバス・時間割（応用生命科学部 履修ガイド 教職課程について）  
<https://www.nupals.ac.jp/about/syllabus/>

〈資料 3-1-2〉 シラバス・時間割（応用生命科学部 第 1～4 学年科目）  
<https://www.nupals.ac.jp/about/syllabus/>

〈資料 3-1-3〉 シラバス・時間割（応用生命科学部 カリキュラムマップ・ツリー）  
<https://www.nupals.ac.jp/about/syllabus/>

〈資料 3-1-4〉 ※応用生命科学部委員会>教職課程運営委員会>教職履修カルテ

〈資料 3-1-5〉 シラバス・時間割（応用生命科学部 第 2 学年科目 第 3 学年科目）  
<https://www.nupals.ac.jp/about/syllabus/>

〈資料 3-1-6〉 シラバス・時間割（応用生命科学部 第 2 学年科目 第 3 学年科目）  
<https://www.nupals.ac.jp/about/syllabus/>

## 基準項目 3－2 実践的指導力養成と地域との連携

### 〔 現状説明 〕

1 学年次より大学独自の必修科目として「学習支援実地演習」を設定している。これは小中学校の特別活動のサポート、児童クラブの夏期休業中のサポート、教育委員会が主催する夏期キャンプのボランティアスタッフ、各種団体が企画する科学実験のスタッフなどに複数回にわたって参加することを課すもので、指導やケアする立場から、教育の場に初めて参加する機会となっている。また 3 学年からは、多くの学生が新潟市や田上町の教育委員会との連携の下で実施されている理科支援員や学習支援ボランティアに継続的に参加し、実験の準備や個別指導などを経験している。（資料 1、資料 2）

教育委員会との連携に関しては、この他にも新潟県教育委員会と県内私立大学による教員養成連絡協議会、新潟市教育委員会と市周辺私立大学による教員養成連絡協議会にそれ

ぞれ参加し、教員養成、採用における課題や疑問について意見交換を行い、地域の教育課題とそれに応じて大学で重点を置くべき指導事項などを確認し合っている。〈資料3〉

教育実習については、実習受け入れに関して大学近隣の新潟市校長会、田上町教育委員会、阿賀野市教育委員会から多大な協力を得て、例年教育実習履修者の7割以上を、上記3自治体の協力校実習で実施している。〈資料4〉

### [ 長所・特色 ]

1学年次から、様々な教育支援の活動に関与することが、教職を学ぶ意欲を高めたり、実際の教育場面における自己の強みや課題を見極めたりすることに繋がっている。また、理科支援員や学習支援ボランティアは、学校現場の教育活動に身を置き、継続的に児童・生徒とかかわることで、実践的指導力を形成する場となっている。特に新潟市の学習支援ボランティアでは、新潟市教育委員会と活動の状況について、定例の打ち合わせ会を持つことで成果と課題が明確になり、より効果的な活動に結びついている。

### [ 取り組み上の課題 ]

コロナ感染症防止の要請から、学校の特別活動をはじめ、社会教育関連の諸活動も縮小したり、外部からのボランティア等を制限している実態がある。今後徐々に再開されていたとしても、少子化が進行する中では、従前の回数や活動規模には戻らない可能性が高く、1、2学年時の学習支援活動の場をどのように確保していくかが課題となっている。

### [ 根拠となる資料・データ等 ]

〈資料3-2-1〉シラバス・時間割（応用生命科学部 カリキュラムマップ・ツリー）

<https://www.nupals.ac.jp/about/syllabus/>

〈資料3-2-2〉※応用生命科学部委員会>教職課程運営委員会>学外活動

〈資料3-2-3〉※応用生命科学部委員会>教職課程運営委員会>教員養成連絡協議会

〈資料3-2-3〉※応用生命科学部委員会>教職課程運営委員会>教育実習

### Ⅲ 総合評価

本学部教職課程の教育と運営に関する成果と課題は以下のように整理される。

第一に、教職課程に関わる教職員の共通理解に基づく協働的な取り組みに関しては、育成すべき資質・能力／目指す教師像が、学部全体のポリシーの見直しと統一性を持って論議・決定され、関係する教職員による共通理解のもと学生に対する教育・指導が進められている。各学年の資質・能力は教職履修カルテ上に講義や演習の内容とリンクした「自己評価の基準となる指標」となって具体化されており、学生の省察に活用できるものとなっている。課題としては、教職履修カルテのフィードバックの体制を強化すること、育成すべき資質・能力を教育の動向や学生の実態に合わせて精緻化し、その都度共通理解を図っていくことが挙げられる。尚、共通理解の対象を学外非常勤講師にまで広げることも課題である。

第二に、学生の確保・指導・キャリア支援に関しては、年度初めに各学年で実施される教職課程ガイダンス等を経て、一学年あたり 10 から 23 人の教職課程履修者、5 から 16 人の理科教職コース選択者を継続して確保しており、「顔の見える」サポート関係の下で、個々の学習状況に応じた丁寧な指導が可能となっている。特に理科教職コース選択者を中心とする教採受験予定者に対しては、対策演習などで補充的な学修を実施したり、理科教職フォーラムで若手教員（卒業生）との交流を持ったり、コース内での協働や学び合いを活性化させたりすることによって、7 年間の教職への正規採用による入職が教採受験者の 5 割を超える成果を生み出している。課題としては、対策演習を正課外で実施しているため学生、教員の双方にとって負荷が高いこと、理科教職コースを選択しながら教採受験を早期に断念する学生への指導が求められることが挙げられる。

第三に、適切な教職課程カリキュラムに関しては、1 学年前期より生物学系、化学系、境界領域の共通必修科目を履修しながら、教職科目の系統的な履修を開始するように設計している。そこで教育への理解やキャリア意識の醸成を進める中で、教職への入職を希望する学生が 2 学年後期から理科教職コースに進むという制度が概ね良好に機能していると評価できる。特に継続的に児童・生徒の支援に関わる「学習支援実地演習」（1 学年から）や、模擬授業や教職実験を実施する「教職演習」（2 学年から）は、教職に関する自己の適性や問題を明らかにし、それを踏まえてより実践的な指導力を身に付ける上で効果を上げている。課題としては、上述の演習の主な対象となる小中学校の特別活動や社会教育関連の諸活動が縮小もしくは外部からのボランティア参加を制限する傾向もあるため、活動するフィールドの継続的な確保が挙げられる。



#### IV 『教職課程 自己点検・評価報告書』作成のプロセス

令和3年5月の文部科学省による教育職員免許法施行規則の改正と「教職課程自己点検評価ガイドライン」の公表を受けて、同年6月に本学教職課程運営委員会で共通理解を図り、自己点検・評価を実施することを決定。委員会内に自己点検担当者（2名）置いた。

同年7月に本学全体の自己点検を担当するIR室との意見交換を行い、全学の自己点検と連携しながら、教職課程運営委員会が自立的に評価、点検を行うこと、評価の基準（観点）等を明確化すること、現在取り組んでいる活動のデータ等を整理しておくことを確認した。

同年10月に全国私立大学教職課程協会が公表した『『教職課程自己点検評価報告書』作成の手引き』（以下「手引き」とする）を参考に、自己点検担当者が本学の点検の手順を検討し、令和4年3月の教職課程運営委員会において評価の項目、評価の観点、点検の実施者（各項目複数）、を決定した。

令和4年5月～11月、各担当が自己点検を実施し、12月の教職課程運営委員会で原案を検討した。その後自己点検担当が全体の文章化とデータの整理を行った。令和5年3月、教職課程運営委員会において自己点検・評価報告書を確定し、学部長の決裁を受けた。その後、教授会に報告し、全学部教職員で共通理解を図った。

同年、前期中に本学ホームページで公開を予定している。

## V 現況基礎データ票

令和4年5月1日現在

法人名	学校法人新潟科学技術学園				
大学・学部名	新潟薬科大学・応用生命科学部				
学科・コース名	応用生命科学科				
1	卒業生数、教員免許取得者数、教員採用者数等				(名)
①	昨年度卒業生数				81名
②	①のうち、就職者数(企業、公務員等を含む)				68名
③	①のうち、教員免許取得者の実数 (複数免許取得者も1と数える)				10名
④	②のうち、教職に就いた者の数 (正規採用+臨時的任用の合計数)				8名
⑤	④のうち、正規採用者数				3名
⑥	④のうち、臨時的任用者数				5名
2	教員組織				
	教授	准教授	講師	助教	その他
教員数	12名	6名	1名	5名	1名